
桜の薔

ドラマー10

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜の薔

【ZPDF】

Z0033D

【作者名】

ドリマーノ

【あらすじ】

長い初恋・・・ひとつ恋は一人の少年の心にひとつ傷を作り、思い出を作った。部活、友達、恋。どれをとればいいのかわからず迷う。そして少年は成長した。・・・初恋・・・覚えてますか？

『銀河』

僕の名前である。

今はまだ小学校6年とこう小さであつながら恋をしている。

『舞』

僕の好きな人であり初恋の人である。

僕と舞は小学校が違う。

だが僕は舞のこと好きである。

当然舞は僕のことを知っている。

でもしゃべることなんてめったになかった。

だから舞の頭には僕なんてまだほんらいなかつた。

出会いは1年半前にさかのぼる・・・

僕はある塾に通っていた。

いつもテストの結果は2番とかなりのできだった。

でもいつも2番だった。

そして僕は思った・・

「ここにいたら2番のままだ！違つてこりで新しいやり方を探す！」

そしてその塾をやめ別の塾に通つた。

その塾にはクラスが2つあった。

SクラスとAクラス。

僕はSクラスに入った。

そして出会つた・・彼女『舞』と・・

彼女は僕が入塾したとき隣の席だった。

だけどまだ僕はそのときは意識なんてしてなかつた・・・

そして塾で大きな変動が起きた。

クラスが6個に増えたのだ。

そして僕はクラス2になつた。

クラス2には元クラスSの中でもそこそこの人人がいくクラスだった。

そしてクラス2で唯一クラス5から一緒にだった人・・・

それが舞だった。

舞は「なんやうちらだけはめられたみたいやなあ。でも、よかつたわあ銀（僕のあだ名）で。

二人でガンバろな」と言つて笑つた。

その時僕はその笑顔にひきつけられつつあった。でも、やっぱりいたの友達なので休み時間は男子同士でしゃべっていた。

そのまま時は過ぎていった。

小6も終わりに近づいてきた。

卒業式の練習が増えて、みんなちょっと緊張気味だった。

でも、中学になつたら隣の小学校もいつしょになるから楽しみだつた。

そして、卒業式がやつてきた。

卒業という大きな関門をひとつ突破したと同時に中学という新しい関門に入る。

その感覚がどうと押し寄せてくる。

緊張していたのが周りからでもわかつたらしい。

「おいおい、こんなんで緊張とはお前らしくないやん

そう言つてくれたのは結局小学校で全部クラスがいつしょだった「
鈴太」^{れいとう}だった。

鈴太はこじわといつ時にいつも緊張してしまう俺をいつも励まして
くれた。

「まあ、楽しいことだけ考えていいつや。彼女とかあ（笑）

鈴太は小学校でも結構もてる男だった。

俺が知ってるだけでも鈴太のことを好きなやつは6人いた。

でも、鈴太は前に

「中学行つたら考えるけど今は別に好きな人なんかいらんで」

と、言つていた。

正直鈴太がうらやましかった。

鈴太はきっと中学について楽しい」とばっかりが頭に浮かんでいる
のだろう。

俺だつてただ悩んでいたわけじゃない。

舞とおんなじ中学になるから少しほは喜んでいた。

「今は舞のことだけ考えよう」

そう心の中でつぶやいた・・・

中学にはいった。

入学式が体育館で行われる前にクラス分けがあった。

「鈴太や健一、竜也とかみんな一緒にありますよう・・・あと・・・いや、なにより舞もおなじでありますよう・・・」

そう願つてクラス分けの表を見た。

1組・・・・・・・ない

2・3・4・5・6・・・・ない

・・・といふことば!

全部で7クラスと聞いていたので胸がわくわくしてたまらなかつた。

いそいで7組の表をみた。

・・・天原健二・・・岡崎銀河、

金田竜也・・・嵯峨原舞・・・前園鈴太・・・

やつた。

みんな一緒にいた。

うれしさのあまり飛び上がりそうになつた。

入学式の時もうれしそうで、校長の話が一切頭に入つてこなかつた。

そしてついに教室に上がるときがきた。

斜め前だつた。

教室でもずっと舞を見ていた。

「帰るか」そう言ったのは鈴太だった。

俺と鈴太は家がすごく近くいつも一緒に帰つていた。

「なあ、鈴太。おまえいい娘見つけた？」

と聞いてみた。

「やうやなあ。前田とか結構かわいかったよなあ・・うーーーん、あとは・・横山かなあ」

「そつか前田かあ。おまえレベル高いの狙うなあ。」

「すぐに落として見せるで……なんてな」

といつてピースした。

〔冗談だつたんだろうけど〕の時の鈴太はすぐいやましかった。

「俺もいつかは舞を落としてみせる。」

そう心の中で誓つた。

でも、この時の俺はまだまだ甘かつた・・・・・

中学生生活もそろそろ1ヶ月がたとうとしていた。

部活動もバスケット部に入部が決定し順調に行く・・・・はずだった。

楽しいはずの毎日。

面白いはずの毎日。

そんな頭の中をめぐっていた物はもう今はなかつた。

席は近いのにまだ中学に入つて一度も舞としゃべつていない。

そりて今時の中学生の割に携帯を持つていなし。

舞は携帯をもつていた。

自分の周りのやつらでも舞のアドを知ってるやつがちらほら見えて出した。

「はあ、なにやつてんだろ、俺」

そんな事ばかりが頭に浮かんだ。

「銀、部活行いづせ」

そう言つてきたのは鈴太だった。

鈴太を含め小学校の頃からの付き合いのやつは9人もバスケ部にはいっていた。

まだ3年が引退していないので1年は外で走るだけだ。

でも、今の面白くも楽しくもない世界で唯一楽しくいられる場所。

それが、部活だった。

そして、次第に部活に取り込まれていくこととなつた・・・8月にさしかかり部活動でも大きなイベントがあつた。

3年が引退した。

2年中心の部活が始まると思っていたが、予想外の発言を顧問がし

た。

「悪いけど勝つためやつたら2年落として1年入れる」ともあんでも
使えんやつは切り捨てる。

使えるやつはどんどん使う。その辺、しっかり理解してけよ。」

やつで練習を始めた。ついで顧問は練習を始めた。

練習中に何人か呼び出されて怒られていた。

「あいつとあの人たちは落とされるんだ。」

そう思っていた。

でも、その後予想外の出来事がおきた。

「前園、岡崎、ちょっと来い。」

ドキッとした。

心臓がおかしくなりそうだった。

自分ではそれなりにうまい方だとおもっていた。

でも、呼び出されてしまった。

終わった。

そう思った。

顧問に注意されてすぐに練習にもどった。

でも、そんな暗い自分はすぐに消えることとなつた。

練習後顧問は

「体育館はそんなにでかないんや。今から呼ぶやつ以外これから外練や。えっと金本・後藤・

中野・・・・・・・岡崎・前園。以上。」

え・・・

今・・なんて・・??

「やつたやん銀一俺ら中やつてよ。」

その時は頭が真っ白になつていた。

でもすぐに気がついた。

「やついえば・・・・・もつき注意された人みんな入つてる。」

あれはいらないから注意したんじゃなかつた。

いるからこそ注意したのだつた。

これまでにない心の底から沸き起る得体の知れない興奮。

「これからの中学生生活が光つて見えている・・・気がした。」

そう、あくまで光っていたのはその部分だけだった・・・

夏休みも終わりに差し掛かった頃、俺は鈴太達3人と合計4人で遊びに行っていた。

健二「もう、夏休みも終わりかあ。」

竜也「男氣しかなかつたなあ（笑。）」

鈴太「それは、お前らの話やろ。」

そう、鈴太には彼女ができた。

名前は横山佳奈。

入学式の日に鈴太が狙っていた女の子の一人である。

鈴太「お前ら好きなやつとかおらんのかい？」

健二「いねえ。もつとましなやつおらんのかなあ。」

竜也「それはおんねんけどな、でもメールしてへんしなあ。なんかいまいち関わりがないつちゅーかなあ」

俺「ちよっと待てよ。おるつて初耳やねんかどー。」

竜也「ああ。だつて隠しどったもん。」

健二「言えや。」

竜也「俺の好きな人は…………嵯峨原…………」

上手く聞き取れなかつた。

俺「なんて？」

もう一度聞きなおした。

竜也「だからあ、嵯峨原と部活でペアくらべの小泉一・何回も言わす
な。」

正直焦つた。

俺は別にルックスがいいわけじゃない。

でも、なぜか俺の周りの友達は学年でもトップ10には入るイケメンばかりだ。

正直かぶつたら勝ち目はない。

竜也「焦つたら銀一まあわかつとつて聞き取りにくくないんだ。」

「

俺「は？」

竜也「隠さんでええつて。お前嵯峨原の事好きなんやろ。」

俺「鈴太ああ……ぱらしたな！！」

鈴太「まさか。お前見とつたら誰でもわかるわ。気づいてへんのはこの中にはおりんやろ。」

健二「そういう。おまえいつも目が嵯峨原の方にいつてるからな」

俺「マジで？」

なんか知らないけど周りから見るとす”いばれていたらしい。

ちよつと恥ずかしくなつて下に顔を向けた。

鈴太「でも、早めにねらわな危ないで。なんにせよあいつ携帯もつとる男子のほとんどとメールしどるからなあ。」

俺「うるさああい。おれのことは俺が何とかするわ。」

明らかに取り乱していた。

でも、自分でもわかつていた。

今の自分には何の力もない事が・・9月も中旬になり体育祭が近づいてきた。

俺は体育祭には騎馬戦の選手として出る事になつていた。

メンバーは当然いつもの4人。

舞は女子障害物競走にでるようだ。

舞は運動神経がいいのにどうしていつも100mには出たくないと言つていたらしい。

理由はわからないけどもつたいたいなと思つた。

そして体育祭の日が来た。

自分を奈落の底に突き落とす日が・・・・・

騎馬戦の時がきた。

俺は一番身長が高いといつ理由で上をやられた。

でも、全体的に高い騎馬に乗つたので一段と田立つ騎馬になつてしまつた。

でも、その分の期待には十分応える事ができた。

全体戦では一騎で向ひのチームの半分を倒した。

一騎打ちでは負けなしで優勝した。

クラスの観覧席に戻ると

「すいいやんあんたら」

「見直したわ。いつつもとは大違い」

とか言われた。

でもなぜか舞は他の競技に目を奪われていた。

その競技は・・男子100M

そして聞きたくない一言を耳にする・・

Aさん「舞ちやあん。桜本君の事みすきこ。」

舞「え?いや、そんな、・・・もうひとつかいねん。みんなあつち行
つちやえ。」

Sさん「またまたあ。てれやなんだからあ。」

体のすべての感覚が消えた。

思考回路だけがフルで活動し、嫌が応にも答えを引き出した。

舞は「翔（桜本のあだ名）」が好き。

実は翔とはすゞしく仲がいい。

翔はバスケ部でも来季キャプテンとされるべく上手くて、顔もいい。

そして俺の頭はひとつ 笑えを導き出した。

・・・・・もうあきらめろ。他の人をあたれ・・・と。

なぜか知らないけど、俺は走っていた。

きっとあの場所にはいたくなかったんだろう。

走った。

とにかく走った。

誰もいないところに・・

そしていつの間にか誰もいない体育館に一人でいた。

俺はしゃがみ込み体育館の隅でうずくまって一粒のしづくを田からこぼした・・

声こそ出なかつたものの、泣きじやぐる音は静かな体育館には大き

すがぐる音だった。

でも、すぐに泣き止んだ。

理由はわからないけど、体が勝手に動いていた。

ダム、ダム・・・・・バス

何故かそのボールはいつもより重く感じた。

でも・・その分暖かい気もした。

「どうした？」

鈴太が来た。

「急に走り出したからびっくりしたわ。何でバスケしとん？」

「急にトイレに行きたくなつて・・。で、なんかリング見たらバスケしたなつてん。」

明らかに見苦しい言い訳だった。

でも

「そつか。ならいいや。ついでやし俺もしていこお

と言つてバスケをしだした。

一人で1対1をした。

その時俺は鈴太に誓つた

「俺はバスケにかけるで」

でも、鈴太はすぐに俺の事を見抜いていた。

「それはやる気か？それともただの逃げか？」

・・・

・・・

言葉に詰まつた・・

でも答えは出た

「今は逃げ場所かもしけん。でも、それをやる気に変える。それだけは誓つた。」

「よお言つた！…だつたらそのやる気を見してもらおか…！」

そつからの1対1は壮絶なものになつた。

一人とも体育祭の出番はもう無いから時を忘れ戦い続けた。

かれこれ1時間はやつた・・・

パスツ・・・ダム、ダム、ダム・・・

俺のスリーが決まった。

そこで一人とも倒れ尽きた。

「そんだけ出来たらほんきやな。がんばろなー。」

「ああ。まかしとけ！ もう誰にも負けん！！」

そう、今は恋敵であつても、そりじゃなくなつても、「翔」には負けない。

そう誓つた・・・前の自分はもういない

今の俺にはもうバスケしか見えていなかつた。

舞という大きな存在が心から完全に消えたわけではないけど、バスケはそれよりも大きな範囲

で俺の心を埋めていた。

そして、2学期も終わり3学期に入ろうとしていた時の事だつた。

何氣ない事で携帯を貰つてもらえた事となつた。

実は2学期の期末テストで3教科で学年で一番を取つたのだ。

社会と英語はだめだつたけど残りの3つで100点に近い点数を取れたからちょっとお願いしてみたのだ。

「どうやら最近携帯を息子に持たせるという事で周りのお母さん方と相談していらっしゃい。」

そしてその携帯は俺の人生に大きな変化をもたらす事となる。

3学期に入りその携帯にもいろいろアドが入りだした。

鈴太にはまだまだ及ばないけど女子のアドも結構入ってる。

その中に舞の名前は無いけど竜也が恋をしている・・・

今や竜也の恋人である小泉の名前があった。

そして3学期に入つて「3年生を送る会」という会を行つた次の日に信じられないニュースが飛

び込んできた。

それは小泉のメールからだつた。

「なあ、ザッキー（俺の新しいあだな）。今好きな人ある？」

「今はおらんなあ・・・しいて言つならボール？（笑」

「実はなあ、相談したい事があんねん。」

前にさあ、佳奈ちゃん（小泉の友達）が鈴太に振られた時にめっちゃ相談に乗つて励ましてあげたつて聞いてんけどさあ、舞がなあ、翔に振られたらしくてさあ・・・

うちが何言つても聞いてくれへんねん（泣

舞とは仲いいんやろ。

ちょっと相談にのつたってくれへん？」

正直かなり迷つた。

実は鈴太や翔に振られたやつの相談に乗つた事はもう10回近い。自分が振つたやつはそんなにいなきつと誰かに相談してるんだろう。

だから普通だつたら乗つてあげたい。

でも、まだ・・・・・ほんの少し、ほんの少しの事なんだけど舞を忘れられずにいた。

舞の相談に乗つてる時に自分の心に眠つていたものがまた目を覚ますかも知れない。

そうなつたら、せつかく鈴太に誓つたのが無駄になる。

『ピーンポーン』

・・・・・「銀河。鈴太君よ。」

何故か知らないけど鈴太が家にきた。

そして鈴太はなんの表情も見せないまま近くの公園に俺を連れて行つた。

「なあ銀。ちよいと用意つぶれ。」

「はあ？ 何でだよ？」

「いいから！…！」

なんか少しキレイみだつた。

・・・

バゴッ。

「いつてえな！…！何すんだよ！…！」

「ふざけんな！ 何で相談に乗つてやらねえんだよ！…！ 小泉からメールが来たよ。お前相談に乗つてくれ

れるかつて聞かれた後から返事返してないそ、うじやねえか。

何でだよ。

「こつも通つのつてやれよ。」

「乗れないよ・・・。俺はあいつよりもバスケをとったんだー。お前に誓つたんだよーー。」

バゴシ。

「それががふやけんなつひとつてんじだよー！

何が誓つただー！

お前相談に乗つてやれないって事はまだ引きずつてんじやんー。

結局逃げたままなんだろ？がよおーー。」

「わかつたよ、つな口聞くくなよーー。

お前に何がわかるんだよーー！

忘れよつとしても忘れられないんだよーー！

「この気持ちがお前にわかるのかよーー。アアーー。」

「やつぱりなんだね。

忘れられないんだろ。

だつたら素直に言えばいいじちゃん。

本人の田の前で堂々と言えばいいじちゃん。

好きなもんはしじうがねえよ。

舞にしつかり話してけじめつけよう・・・

「でも、あいつは今、翔に振られたばっかで・・・」

「だからなんなんだよ。

お前があいつを好きなのに翔が関係あるのかよ。

これはお前と舞の問題だろ。

だつたらじゅんと面向かって一発決めてこいよー」

そう言って鈴太は公園を去つていった。

俺はすぐに小泉にメールを打つた。

「その相談乗つた！

舞は俺が何とかする！・・

舞のアドと住所教えてくれ！」

「わかった。

舞の事、よろしくなー

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「・

すぐに舞にメールを打つた。

「今からお前の家に行く。

「どうしても言わなきゃならない事があるし、みんなから舞を~~話~~され
た。

あと10分したら家の前に出てくれ。」

はじめは出でてくるかどうか不安だった。

でも、舞は出てきてくれる。

何故かそう信じる事が出来た。

そして舞の家に着いた。

舞は玄関に座っていた。

舞の顔は少し暗がりの中でもわかるくらい目がはれていた。

「舞、聞いたよ。

翔の事・・・残念だつたな。」

「残念じやすまないのーー

もう、うひ、じょしたらええかわからへんわ。」

「ひー、ひー、ひー、ひー……

「なあ舞。

話したい事あるか?」

舞は首を横に振った。

「わつか。

でもな、俺はたぶんまだ舞はなんか話したい事が心につまつると
思うねん。

「ちやうづ。」

舞は首を振りながつた。

「大丈夫。

舞がしゃべりたくなつたら言つてくれ。

それまでいひして隣におつたる。「

舞は首を縦にふつた。

どのくらい時間がたつただろうか。

よくわからないけども、周りは暗くなっていた。

そして、舞はゆっくり口を開いた。

「あのな、うつ・・

あのなつ

「ゆつくつでええって。

落ち着いて。

な。」

「ふう

舞は静かに深呼吸をした。

そしてゆつくつ話し始めた。

「つけなあ、翔の事かなり前から好きやつてん。

確か小6の終わり位。

翔がうちこむかってな、

このクラスおもんない。

お前おらんかったら最悪の6年生生活やつたって、ゆーてくれてん。

うちな、すうじい嬉かつてん。

でな、その後卒業してすぐ翔のアド聞いて、何とか関係作つていこ
ーとしてん。

でもな、それだけやつたらあかんと思つて鈴太君に相談してん。

銀は携帯持つてないからつりも相談できんかつてん。

んでな、鈴太君が無理して間取り持つてくれてんけどな、翔が全然
相手してくれんからな、うち思い切つ

て聞いてみてん。うちの事ビツ思とるかとつりが翔の事ビツ思とる
か。

そしたらな、翔な、

悪いけどお前には興味無いって即答されてな、

もうその時は何が何かわからんくなつてな、すぐに家帰つて部屋閉
じこもつて・・・

学校も今日いけんであ・・・

そしたら今日ハイちゃん（小泉）からメールきてな、相談してん。

「やつか・・・

うん、言つてくれてありがとお。

んでな、今はどじつ思とん?」

「もうええわ。なんか気が抜けてしまひ。

ちよつと聞んは一人である。」

「わかった。

それが舞の出した答えやな。

でもな、そんなに簡単に踏ん切りつけてええんかなあ。

少なくとも俺はめつちや後悔した。

簡単に踏ん切りつけてもうくな事ないで。」

「でも、・・・・自分ではめつちやつてゆーとつたけど、たぶんそうでもなかつたんかなあ。」

「やう思うんやつたらもうこの事につけば何も言わん。・・・。
お願いがあんねんけど、今からちよ

つと時間くれへん?」

「うーーーん、まあええよ。話聞いてくれたんやし。」

そして一回深呼吸をした後、今度は俺が口を開いた。

「俺な、小4のときわあ、一田、まれした奴がおつてな、

そいつとは、それなりにしゃべったりしていい感じやつてん。

でも、中学にはいつたらその関係が一気に壊れてさあ、

もうその時はほんまに嫌になつた。

でも、そいつのことやつぱり諦められんくてなあ、

しゃべれんなりに想い続けとつてん。

そしたら知らん間に周りは彼女が出来ていつてさ、でも自分には好きな人があるから平氣やつてごまかし

とつてん。

でもそいつに好きな人がある事知つてもーてん。

それも、俺の友達。

しかもどれをとつても俺より上のイケメン君。

正直諦めたらどんなに楽か、そればっかり思い浮かんだ。

それでもやつぱホンマの好きつて諦められへんもんやつたわ。

でもそれに気がつくのに鈴太や小泉の力借りなあかんかった。

あいつらが気づかしてくれてん。

だから俺は決めてん。

自分の思いを全部ぶつけるつて。」

「銀は強いなあ。でも、何でそんな話をひきこ？」

「今言つたやろ。

好きな人に全部話すつて。」

「え？

それ・・・「うちの事？」

「せうせう。

わざわざ聞いてほしい事がある。

俺は・・・お前がずっと好きやつた。

それは一回も途切れた事はない。

でも今俺がしゃべつとんは告白やない。

これは俺の意思表明であつて、まだ告白はできひん。

確かに今すぐにでも告白したい。

でも今ここでバスケよりも大事な物を作つたら俺がどうしても勝たなかんやつに勝てんくなるし、鈴太

にもバスケにかけるつて約束した。

だから、引退するまで待つといつてほしい。

その時が来たら何があつても皆曰くある。

たとえお前に彼女が出来とつてもいい。

それはいい。いつ。

・・・・・

「ちよつと待つてな。急な事やから・・・

「とつあえず今日はもう帰る。もう少し時間帯もやばこわ。親に心配かけたないしな。」

「うん。わかつた。」

そう言つて舞はゆっくり家に戻つていった。

家に帰る途中、一人ベンチに座つて考え込んだ。

これでよかつたのか？

このタイミングで言つと舞に余計な負担がかかるのはわかっていた。

自分のやつた事が本当に正しかったのか、それは自分の力ではわからなかつた。

只、舞に想いを伝えずに後悔する事だけは避ける事ができた。

それだけは確かだつた。

それだけが確かだつた。

でも、確かなのはそれだけだつた・・・

家についてもそれしか考えれなかつた。

そして静かな部屋にメロディーが流れた。

舞からのメールだつた。

「明日、もう一回会いたい。家これる?」

「わかつた。明日は部活休やからいつでもいいけど。いつ行つたらいい?」

「出来るだけ早く。10時くらいには会いたい。」

「じゃあ10時に行くわ。」

「了解。待つてる・・」

絵文字1つない寂しいメールだつた。

でも、絵文字が無い方がよかつた。

その分真剣さを物語つていた。

電気を消して真っ暗な状態。

なのに目は、はっきりと開いたまま。

布団に入りながら、一人、明けない夜を過ごした・・・

朝日が窓から差し込む

部屋にあるテレビに反射し目に当たる

眩しさのあまり目をつぶる

閉じた目はすぐ重かつた

眠れなかつたからか、まぶしかつたのか、現実から逃げたかつたから、

それはわからなかつたけど

ただ、その時はすぐおもかつたんだ・・・

朝9時

約束の時間まで後1時間。

舞の家までは自転車で10分で着くから15分前に到着予定とする
と、

あと30分したら家を出る事になる。

すでに髪型はセットし終わって、飯も食べ終わっていた。

家を出るまでの30分は今までの舞との思い出しを思って出すのは短
すぎた。

9時30分になり家を出た。

ゆっくり走っているはずなのに気がつけば舞の家はすぐ田の前だっ
た。

家に着き、緊張する田分をドアにかしづつ口を押さえたり深呼吸
をしたりした。

すると後ろから声が聞こえた。

「銀つて以外に緊張するタイプなんや。」

舞だった。

「「あんなあ、びっくりさせて。

銀がどんな感じで家に来るかきになつてやあ。」

その時に見せた笑顔は、俺が一田ぼれした時の笑顔にそっくりだつた。

そして舞は俺の隣に座り、話しだした。

「うひつて鈍感なんかなあ？」

いろいろ考へてんけど、やつぱりここまで好きになつてもらえるなんて幸せやで。

銀とは小学校の頃からの知り合いやのにつちこつも銀に助けてもらつてばっかりやん。

なあ銀、なんでうちなん？

「・・・・・・・・・だつて一緒におつて楽しかつてんもん。それに・・・可愛いし。」

二人とも真つ赤になつた。

「銀はおもしろい事言つなあ。

今度はうちの決意聞いてくれる？」

「うん。」

「うちはある人を待たしてゐる。」

うちは何があつてもその人の意思に答えたい。

うちみたいな人を愛し続けてくれてゐる那人になんとしてもお返ししたい。

それにその時が来るまで愛し続ける事でその人がうちに抱いていた心を理解したい。

銀、部活がんばれ！！

何の心配もいらん。

銀がうすうす話す時がくるまで「うちも待つ。

今は部活にかけてもええで。」

涙が出そうになった。

ここに来るまでに一体どれだけの時間を費やしたのだらう。

どれだけの人を巻き込み、どれだけつらい目にあつただらう。

でも、今は違う。

一握りの幸せをつかむにはこの代償は軽いものなのかもしれない。

そして舞はこう付け加えた。

「うちらは付き合つてないけど、お互に愛し合つてる。

絶対に忘れんとつてな。」

「大丈夫や！」

俺には自信があるーー！」

そう言って笑いあつた。

もう冬も終わり春が見え始めている一日の出来事だった。

あの春の日の出来事から、約1年がたつた。

まだ舞は彼女にはなつていない。

でも、一緒に遊びに行つたり、帰つたり、喋つたりしている。

部活も最後の試合まで1週間をきつていた。

そして、ある日の帰り道の事だった。

その日は舞と一人で帰っていた。

「 もうそろそろ部活も終わるんかなあ。」

「 弱気やなあ。キャプテンがそんなんじやあ誰もついてこんでも」

今俺はバスケ部でキャプテンをやつている。

はじめは翔がキャプテンになる予定だったが、あの日以来の猛練習でキャプテンを勝ち取る事ができたの

だった。

最後の総体の相手は前の大会もその前も1位の中學。

いつも1回戦負けの俺達のかなう相手じゃない。

「 なあ、やっぱり奇跡おこせな勝てんよなあ。

でも勝ちたいなあ。」

「 つひも応援にいったるからがんばってーーー。」

「 やれるだけやつてみるかーーー。」

一人で歩いている道

桜の木が一人を祝福するように花びらを散らせつかせる

そんな中に見つけたふたつの薔

それはまるで花開くその日を心待つにしているようだつた。

そう、それはまるで花開く一人を夢見る俺と舞のようだつた。

舞、いつか二人で「彼女です」「彼氏です」って言えるようにならうな・・・・・

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0033d/>

桜の薔

2011年1月8日22時02分発行